平成２１年度
「学校支援地域本部事業」
実施報告書

平成 22 年 2 月

和歌山大学教育学部附属小学校
和歌山大学教育学部附属中学校

目　　次

１　はじめに・・1

２　運営協議会・・・3

３　学校支援地域本部事業の内容及び実施方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

４　学校地域支援本部事業の活動内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

５　成果報告会・・・17

６　おわりに～本年度の取り組みを終えて 成果と課題～・・・・・・・・・・・・19

1　はじめに

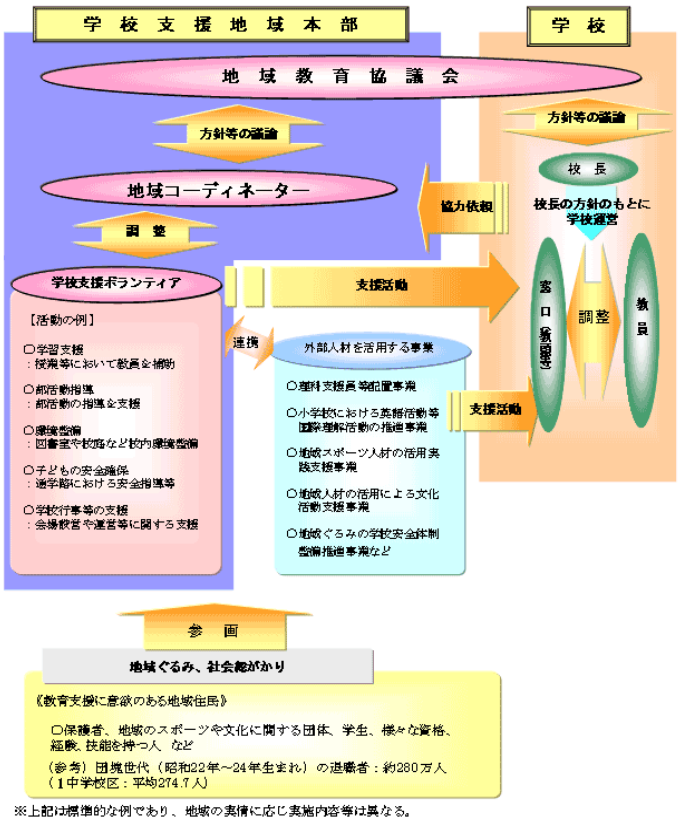
社会がますます複雑多様化し，子どもを取り巻く環境も大きく変化する中で，学校が様々な課題を抱えるとともに，家庭や地域の教育力が低下し，学校に大きな役割が求められるようになっている。このような状況の中で，これからの教育は，学校だけが役割を背負うのではなく，これまで以上に学校，家庭，地域の連携協力のもとに進めていくことが求められている。

平成 18 年におよそ 60 年ぶりに改正された教育基本法に学校，家庭，地域の連携協力に関する規定が新たに盛り込まれた。

> ○教育基本法　　（学校，家庭及び地域住民等の相互の連携協力）
> 第 13 条　学校，家庭及び地域住民その他の関係者は，教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに，相互の連携及び協力に努めるものとする。

学校支援地域本部事業は，これを具体化する方策の柱として文部科学省がスタートしたものである。学校・家庭・地域が一体となって地域ぐるみで子どもを育てる体制を整えることを大きな目的としたものである。

具体的には，それぞれの学校の状況に応じて地域ぐるみで学校の教育活動の支援が行われることで，(1) 教員や地域の大人が子どもと向き合う時間が増えるなど，学校や地域の教育活動のさらなる充実が図られるとともに，(2) 地域住民が自らの学習成果を生かす場が広がり，(3) 地域の教育力が向上することが本事業で期待されている。



和歌山県では，「きのくに共育コミュニティ」として各市町村において中学校区単位で取り組み，ひと足早く成果をあげている。

附属小・中学校においては，県教育委員会と連携を取りながら，特定の「地域」をもたない附属学校として，どのように「地域」を捉え，「地域」と連携していけるのか，本事業を通して研究実践に取り組みたい。

また，附属学校では従来から保護者や大学生，あるいは和歌山市内等に住んでおられる方々から多くの支援をいただいていることもあり，それらを見直して深められる機会にできたらと考えている。

平成 21 年度は，附属小・中学校においては，特定の「校区」をもたない学校として，どのように「地域」を捉え，「地域」とどう連携していけるのかということについて，論議を重ねながら，本事業に取り組んできた。

〇学校支援地域本部事業における「地域」について

（１）附属小・中学校における「地域」は，対象児童・生徒が一定時間内に通学できる範囲が原則である。従って行政区画にとらわれない「地域」という位置づけができる。一方，公立学校おける地域は，基本的には行政の対象となる一定のまとまりで構成されているのが原則であるから，行政的な対応を求めるときには，行政としての対応がある程度可能であるが，附属小・中学校では多くの行政単位にまたがっているのが最大の特徴である。しかし，児童・生徒から見れば，自分の住んでいる地域があり，子どもたちの発達の土台としての「地域」が存在する。つまり，子どもは生活圏を示す「地域」の中で生きているのである。

（２）　一方，附属小・中学校の建造物が存在する地域が小・中学校における実質的な地域を構成している。このことは，学校を取り巻く環境として，また，学習を成立させることに関連した地域の存在がある。例えば，小学校における生活科・社会科の「学校の回りの探検」や中学年社会科での教育内容（地図づくりや市の特徴の把握，学校の近くのスーパーマーケットや農家の生産や市を中心とする工場の工業生産，地域の開発などの単元）は，子どもの学習成立の要件として，直接的な「地域」となる。学習に関しては，小学校だけでなく，中学校においても，総合的な学習や社会科をはじめ，その他の教科学習等で，「地域」を取り扱う場合は，同じような把握ができる。

（３）　こうした「地域」に生きる子どもたちには，「地域」と関わる取り組みのなかで，どのような課題があり，どのような取り組みによってその課題を克服していくのかというのは，本事業での取り組みそのものであり，その成果は，広く公立校においてもその成果を共有することができるものである。

（４）　子どもの成長にとって必要な学校の教育活動に関連した取り組みや地域独自の取り組みの中で，どんな取り組みが可能か，また，取り組みの意義は何か，などを明らかにしながら進めなければならない。

学校が子どもに働きかけるすべての教育活動のなかで，家庭やそれを取り巻く学校（環境）に関係する活動を視野に入れ，以上のような「地域」のとらえ方を基本に，本事業を展開してきた。したがって，私たちは，保護者・同窓会（卒業生）・学校近隣の地域・和歌山県や和歌山市等の公的機関・和歌山大学などを地域ととらえ，むしろ地域が豊かであるという考えのもとに，それらを有効に位置付けることで学校の教育活動を活性化させ，充実させるかという観点で取り組んだ。特に，本年度は和歌山大学との連携を深めたり，大学の施設や人材を活かした取り組みを重視した。また，地域のとらえ方を検討するなかで，地域の人材をボランティアやゲストティーチャーとして学校に招く機会が格段に増加した。必要なときにはいつでもお願いできるように，これまでの取り組みを「どの教科領域で・どんな内容で・どの方を」という形に整理して人材バンクを作った。また，伝統文化や歴史的な面に強いコーディネーターのおかげで，「能狂言」「和歌浦の案内」「和歌山の歴史」などの ゲストティーチャーも新たに付け加えることができた。

２　運営協議会

（１）　委員

氏名	所属・役職	役割
木綿　紀文	附属中学校育友会長	座長
東　　伸治	附属小学校育友会長	副座長
川本　治雄	附属小学校校長	
柏原　　卓	附属中学校校長	
岡本　公博	県生涯学習課地域教育班長	
堀内　秀雄	和歌山大学生涯学習教育研究センター長	
佐々木　和彦	吹上第一自治会長	
長島　友美子	附属中学校教育後援会鑑査役	
岡村　周成	コーディネーター代表	
北川　千晶	コーディネーター代表	

（事務局）

氏名	所属・役割	
北原　博男	附属小学校副校長	
栗本　昌彦	附属中学校副校長	
妻木　康子	附属小学校・中学校係長	

（２）運営協議会の開催

①　趣　旨

「学校支援地域本部事業」実施 2 年目にあたって，「地域」のとらえ方を見直しながら，より充実した事業の在り方を検討する。

②　日　時　第 1 回　平成 21 年 6 月 1 日（月）　15 時 30 分～ 17 時

第 2 回　平成 22 年 2 月 12 日（金）　9 時 30 分～ 11 時

③　場　所　和歌山大学教育学部附属中学校会議室

④　日　程

第 1 回

・学校支援地域本部事業の趣旨と 1 年次の取り組みの説明

・県「きのくに共育コミュニティ」の取り組み紹介

・協議

第 2 回

・学校支援地域本部事業の 2 年次の取り組みの説明

・「きのくに共育コミュニティ」の 2 年次取り組み紹介

・協議

（３）運営協議会のまとめ

第１回

・附属で共育フォーラムを開催してみてはどうか
・多くの人の目で附小・附中の子どもたちを見守ることが大切
・共育フォーラム開催の後，ワークショップをしてみてはどうか
・まず「推進本部」を設置し，2 ヶ月に 1 回会議を行い，お互いの目標を明確にしておくことが大切である
・附属は校区が広いので広報活動など積極的に地域と係わっていき，自分たちの活動について知ってもらうことにより新たに人間関係ができるのではないか
・先ず，子どもたちが中心になって発案・参画することが大切
・附属の特色を生かして，大学教授，院生，学生を活用し，附属独自の活動ができるのではないか
・県教育委員会より，テスト期間中に大学生が中学生の学力補充を行ってもらったり，保護者の方に家庭科の授業を手伝ってもらうことで学習支援活動の成果は大きい
・地域・学校・家庭が一緒になって考え，自分たちで問題を解決することが理想の在り方である

第 2 回

・附属の場合，地域をどうとらえていくかが課題
・2 年目の成果として，学校周辺の方々の人間関係が希薄だったのが，コミュニティができてきた
・3 年次の課題として，地域や保護者に積極的に取り組み内容について広報を行うことが必要
・コーディネーターは子ども，教師，保護者をコミットしていくことが大切である

（４）事業推進本部

運営協議会の下に事業推進本部を置き，年度途中で取り組みを振り返ることとした。

① **開催日**　平成 21 年 10 月 14 日（水）　10 時～ 11 時 30 分
（中学校 4 名・小学校 3 名・事務局全員出席）
・本事業の成果発表・報告について
・情報交換

② **内　容**
・成果報告会（平成 21 年 11 月 23 日（月）　県教育センター学びの丘 Big-U）については，本年度は附属中学校が担当する。
・成果報告の形式は，昨年同様，展示用ポスターを作成することとし，附属小学校と附属中学校がそれぞれ 1 枚ずつ作成する。
・地域コーディネーターの活動として，9 月 24 日（水）7:50 ～ 8:20 まで挨拶運動を実施した。11 名の参加があった。

・今，やっていることを継続することが大切
・９年間（小・中連携）で計画を立てる。

３　学校支援地域本部事業の内容及び実施方法

（１）運営協議会の開催

特定の地域をもたない附属小・中学校においては，「地域」を学校周辺の方々，和歌山大学，卒業生，保護者，市内のさまざまな機関と考えている。

（２）学校支援ボランティア募集に係わる啓発，人材バンクの設立

学校支援ボランティアを募集するためのチラシを配布し，人材バンクを小・中学校共同で設ける。

（３）事業成果の報告会＜11 月 23 日（月）開催＞

本事業の取り組みの成果を県教育委員会と合同で開催し，学校支援ボランティアの組織や活用の仕方について県内普及を図る。

（４）学校支援ボランティアの取り組みと支援

（コーディネーターが中心となって，小・中学校のボランティアの連携を進める。）

［学習支援ボランティア］

・校外学習の引率補助，職場体験の受け入れ協力と引率補助，保健体育の水泳・柔道の指導補助，生活科における和みカリキュラムの指導補助など

［ゲストティーチャー］

・作法の指導，留学生による国際交流，子どもたちにできる環境問題，和歌山の地域や郷土にまつわる話など

［図書ボランティア］

・附属小・中の図書館の整備，貸し出し，本の修繕，読み聞かせ，人形劇，紙芝居作など

［環境支援ボランティア］

・緑豊かな敷地を生かした花壇の整備，野菜作り，植木の剪定と草刈り，校舎内外の清掃・補修など

［学校行事・部活動支援ボランティア］

・運動会や体育祭，校内音楽会への補導補助，運動部やブラスバンド部の部活動の補助など

４　学校地域支援本部事業の活動内容

（1）　学校周辺の方々によるボランティア活動

〔附属小・中学校〕

①環境支援ボランティア

環境支援ボランティアは，学校の菜園を利用して花や野菜をつくって持ち帰ることができるようにしている。地域コーディネーターが学校周辺の地域から環境支援ボランティアを組織しその数を増やし，現在は 19 名に至っている。

特定の地域をもたない附属学校にとってボランティア活動が継続されるためには，ボランティアにとってもメリットが必要だと考えている。

〈 学校が地域の方々のコミュニケーションの場に 〉

花や野菜づくりを通して，これまであまり話をする機会のなかった方同士が親しくなるなど，学校が地域の方のコミュニケーションをつなぐ場にもなってきている。草刈りや剪定を行いながら楽しく菜園づくりに取り組んでいる姿が見られる。

②あいさつ運動

地域の方々に，学校の校門で登校時に朝の挨拶運動をお願いした。

生徒から礼儀正しい返事が返ってきたとお言葉をいただいた。地域との関わりが少ない附属の児童・生徒にとって，地域の方々から挨拶の一声をかけていただき，生徒にとっても新鮮なものとなった。

〈学校周辺の地域の方々を招いてのフォーラム〉

地域の環境支援ボランティアの方々に集まっていただき，さまざまなご感想やご意見をいただいた。

学校がきれいになってきていることや生徒のマナーがよくなっていること，ボランティアを行って花や野菜作りに楽しく取り組めていることなどが出された。

〈学校周辺の地域の方々を招いての学校図書館見学〉

学校の近くに住まわれていながら，附属中学校をご覧になられたことのないボランティアの方々も多く，本校の図書室で本を手にされたり，授業をご覧になったりした。

今後，地域の方々に学校図書館を開放して読書をしていただける機会を設けたい。中学校の蔵書は大人にとっても十分読めるものであり，公立図書館に行かなくても，すぐ近くにある本校の図書館で読書していただくことが可能であり，地域の方々が学校図書館に来ていただける機会を増やすことにより，児童・生徒とふれあう機会が数多く生まれてくると考える。

（２）和歌山大学の支援によるボランティア活動

大学の附属学校であることを生かして，和歌山大学を「地域」の一つとして考えている。

〔附属小学校〕

①陶芸教室

6 年生児童が陶芸体験を行った。和歌山大学教育学部寺川剛央准教授に，卒業制作としての湯飲み茶碗作成の手ほどきを受けた。

土から焼き物をつくりあげる過程をわかりやすく教えていただき，一人ひとりが自分の作品を作り上げることができた。

②古典の学習

6 年生の学習で，和歌山大学教育学部菊川恵三教授に，「和歌とことばのなぞ」というテーマで和歌山に関連する万葉集の和歌などを教えてもらった。

山部赤人など万葉歌人の作品を分かりやすく解説してもらった。

③水道水はどこからくるのか

4 年生の社会科の学習の一環で，和歌山大学システム工学部江種伸之准教授に持続可能な資源「水」について教えてもらった。実験も取り入れながら解説してもらったので，興味を持って分かりやすく学習することができた。

④環境問題

4 年生が大学探検を行い，教育学部長の松浦善満教授に和歌山大学教育学部について説明をしてもらった。

⑤環境問題

総合学習の一環で環境問題に取り組んでいる 6 年生が，和歌山大学システム工学部の養父志乃夫教授に，自然環境の保全と修復について実地指導をしてもらった。